

2. 里地・里山について

里地・里山とは都市や奥山に対する語で、集落、耕地、日常生活や諸産業に必要な資材を供給する山林原野等が複合した代償植生域を指す。そこでは人間だけではなく、動植物の生活も営まれている。

里地・里山の様相は、1950年代後半頃から始まる農業の機械化、家庭用燃料の石油ガス化、人口の過疎過密化、その後の減反政策等に伴って変容した。具体的には、農耕用牛馬の飼料及び茅葺き屋根材を採取する草場や萱場、家庭用燃料を供給する薪炭林等が、大型住宅や果樹園が造成されたり、植林地化されたこと、里地・里山の多くが過疎化し、農林業従事者が減少したことによる管理不足の森林が増えたことである。

里山の代表的な森林植生の一つに雑木林がある。雑木とは、ヒノキは宮殿の柱に、スギとクスノキは船に、コウヤマキは棺桶にと日本書紀に記されたように、日本における伝統的な用材感にもとづく用語で、真木に対する語である。真木は建築材等として優れた性質をもつ樹種、雑木は薪炭にしかならないような樹種を大まかに指している。真木には針葉樹のスギ、ヒノキ、アカマツ、クロマツ、コウヤマキ等、広葉樹のクスノキ、ケヤキ、カシ類が代表的である。雑木には、照葉樹林域の代表的樹種シイ（コジイ、スダジイ）、タブノキ、ヤブニッケイ、モチノキ、コナラ等である。これら雑木からなる樹林が雑木林である。